

第2回 奈良市眺望景観保全活用計画市民講座

日 時：平成23年10月8日(土) 14:00～16:00

場 所：奈良市中部公民館 第4講座室

参加者： 名

アドバイザー：奈良女子大学教授 増井正哉

事務局：奈良市景観課

1. 開会挨拶

仲谷課長：第2回講座を開催させていただく。今回も非常に良い天気、秋真っ盛りである。行楽に最も良いシーズンである。

本日は事例紹介が多くなると思う。奈良らしい眺望景観や重要眺望景観として追加すべきもの等について、意見をお伺いしたいと考えている。

2. 議 事

徳岡係長：本日も意見用紙に沿って説明を進めたい。本日は、奈良らしい眺望景観の保全活用の目標と方針についての設問1と、奈良らしい眺望景観候補についての設問2がある。それぞれ説明させていただく。

(1) 保全活用の目標と方針及び奈良らしい眺望景観候補について

徳岡係長：(先週のおさらい及び「奈良らしい眺望景観の保全活用の目標と方針」「奈良らしい眺望景観候補39件」の説明 - 略)

市 民 A：多くの候補からのスクリーニング作業のなかで、東大寺二月堂裏参道からの夜の風景を集約され、昼の風景にしている。東大寺二月堂の松明が灯る風景は全国区の風景である。集約することでかえって奈良らしさが逸失しているのではないかと思う。集約途中にそのような検討はなかったのか。

No.12の「知事公舎前から依水園及び若草山への眺望」について、この写真を見る限りでは、依水園の良さが分かり難い。どうすれば依水園を良い眺めとして見ることができるのか、選考理由が分からない。

その他にも色々意見はあるが、意見書に書かせていただく。

例えば、No.34の田園風景やNo.37の月瀬梅林は季節眺望であると思う。季節を外せばこのような綺麗な景色は見えない。季節を盛り込んで良いという考え方であれば、日や季節を限った風景をもっと加えた方が奈良らしさがより伝わると思う。若草山の山焼きの風景は全国区の風景である。

仲谷課長：一点目について、確かに東大寺二月堂の松明のシーズンは非常に素晴らしい景観となる。しかし、奈良らしい眺望景観の選出は、基本的には、保全と活用の計画を立てることを目指したものであり、「奈良らしい眺望景観39選」というものではない。東大寺二月堂裏参道からの眺望であれば、この場所の雰囲気や景観を保全していかなければならないという視点から、左側の塀が残る方策や調和しない建物が建てられないようにしていきたいという思いがある。夜の風景がだめだというわけではなく、夜も昼も含めて素晴らしい場所であるという認識である。その現状が良く分かる昼間の風景を代表させて示しているものである。集約という意味は昼間だけが良いという訳ではない。

公舎前からの依水園及び若草山への眺望については、依水園が素晴らしいという訳ではなく、沿道の塀や庭木、奥に見える若草山という景色を残し、活用していかなければならないという視点から選出したものである。正面には依水園も位置していることから、依水園も視対象の一つとして示しているだけであり、この景色全体が奈良らしいという判断である。

市民 A：受け取る側は、奈良に住む人も奈良に来る人も楽しめる眺望を選定したものと捉えられると思う。計画が熟していくなかで、そのようなことをちゃんと説明する必要があると思う。

増井教授：39件はランキングしたり39選とするために取り組まれているわけではなく、将来的な保全活用計画を策定するための材料として位置づけられているものであることをしっかりと説明しておく必要がある。その場合、眺望景観のタイトルは大切である。写真を見て、No.12では依水園、No.34では茶畑を探されてた人が多いと思う。眺望景観はタイトルに引っ張られるところがあり、将来的にどこかの眺望景観を保全しようという場合、タイトルを下手につけると結局その建物さえ見えれば良いということになりかねない。そのあたりは慎重にし、今後のプレゼン方法も考えていただきたい。

仲谷課長：大池や平城宮跡などからの素晴らしい眺望景観を保全し、残していこうということがこの計画づくりの出発点であった。しかし、それだけではないだろうということで公募させていただき、既存資料などの調査も行った上で117件の候補を抽出してきた。そのなかには、素晴らしいけれども他の都市にもありそうな景色もある。そこで、「奈良らしい」という定義を「目に見える景観の特性」「心で感じる景観の特性」「情報としての景観の特性」の3つから設定し、それをもとにピックアップしてきたところである。それがたまたま39件であっただけであり、他にも良い眺望景観があれば、40件や41件になっても良い。選んできたものは、示している写真の景色だけではなく、周辺環境や時間、季節なども含めたものとして捉えた財産として守っていこうと考えている。タイトルは検討させていただきたい。

市民 B：前回出席していなかったもので、もう一度「奈良らしい眺望景観」の定義を具体的に説明いただきたい。No.12の眺望について、白い塀が連なり、進んでいくと南大門の屋根がふと見える良い景色である。白い塀については、県は知事公舎や副知事公舎について、今後公開して、何らかの形で活用していくことを打ち出しており、この塀を潰してしまう可能性もあると聞いている。そのような時に、この塀は眺望景観として大切なものであり、是非残して欲しいということ市から言っていただくことが大切になる。そのようなことを見据えておかなければならない。このタイトルでは白い塀は消えてしまう可能性がある。それぞれの眺望景観の肝は何かを明確にしておかなければ、本当に守りたいものを守れなくなってしまう。奈良らしい眺望景観候補としてあげられているもののうち、No.28と29に違和感がある。薬師寺境内や唐招提寺境内はお金を払わなければ入れない。お金を払う以上、その眺望を守るのは薬師寺や唐招提寺の責任においてやってもらえば良いと思う。そこに市が関わる問題ではないのではないか。

既に様々な法的な措置があり、よほどのことがない限りなくなる眺望景観がある一方で、すぐにでも壊されてしまうおそれのある眺望景観がある。先ほどの知事公舎の塀もそうである。そのなかで特に最近問題となっているのが、近鉄奈良駅前の眺望である。昭和45年につくられた行基菩薩の噴水と登大路の坂道とその先に見える県庁という景観が奈良の景観として親しまれてきたが、県が行基広場に屋根を付けるということを言われている。そうすると空に雲があり、県庁の屋根が少し見えているという景観はなくなってしまう。人間の都合で手を加えたらなくなってしまう眺望景観をもっと大切にしていかなければならないと感じた。

仲谷課長：最初に「奈良らしい眺望景観」のとらえ方を簡単に説明させていただく。「目に見える景観の特性」は、実際に視覚的に素晴らしいと感じられる眺望景観である。世界遺産などの歴史的に重要な建造物を視認できるということなどが含まれる。「心で感じる景観の特性」は、奈良にある社寺や仏閣が見えていることだけが奈良らしいわけではないのではないかと、という考えに基づいている。奈良には長い歴史を感じる歴史や行事、説話、祭りなどがある。それらは景観を感じる上での重要な要素であるとしたものである。「情報としての景観の特性」は、奈良の場合、文献や書籍などが奈良のイメージを形成しているという場合も多いことを考慮したものである。古い地図や絵巻、写真など、また最近では情報雑誌なども該当するが、それらが奈良の景観を特徴付けているのではないかとということである。これら3つの景観の特性を受け入れられる眺望景観を「奈良らしい眺望景観」として位置付けている。

二点目の知事公舎前からの眺望景観について、No.12を奈良らしい眺望景観と位置付けるのであれば、当然それを守っていく必要はある。庭木や塀の保全などを立案していきたいと考えている。

三点目の薬師寺境内や唐招提寺境内からの眺望景観について、当初入場料を払わなければならない視点場は外していたが、そうすると皆が奈良らしいと思う眺望景観が抽出されなくなってしまったため、有料であっても対象にしていくこととした。当然、寺がその景観を守っていく必要があると思う。しかし、写真では薬師寺の背景には空が広がっているが、そこにビルが建てられるおそれもある。現在は、薬師寺周辺は風致地区などの規制で守られているが、遠くには用途が住居地域の区域もある。今後、少しでもそのようなおそれがあるのであれば、事前に対処しておこうという意図から、境内からの眺望景観も本計画の対象としている。

四点目の近鉄奈良駅前については、JR奈良駅も含め、観光客が奈良へ来て最初に目にし、奈良を感じる場所である。極論は全ての建物の高さを抑えてアーケードを撤去するなどすれば良いが、それは現実的にはできない。全体的な雰囲気の中で、県庁の手前の緑地の保全や興福寺の看板だらけのフェンスの改善などは当然実施していきたいし、できる限り現在の良好な空間を守りたいと考えている。大宮通からの眺望景観は奈良らしい眺望景観として位置付けており、当然、近鉄奈良駅前もそのうちに含まれるものと考えている。そのなかで、保全や再生、活用を進めていきたいと考えている。

市民C：117件を公募等から抽出し、そのなかから39件を奈良らしい眺望景観候補として選出されているが、それらを見ると、世界遺産の8つの資産のうち、東大寺、興福寺、薬師寺、唐招提寺が含まれている。しかし、元興寺、春日大社、都市近郊の珍しい原始林である春日山原始林が入っていない。春日山原始林は、春日山として入っている。8つの資産群のうち半分程度は含まれており、それ以外にも柳生や霊山寺なども含まれている。世界遺産でないものについては、秋篠寺は有名な仏像もあり多くの観光客が訪れる。里山を借景とした秋篠寺なども入っていても良いのではないかとと思う。京都などに比べ宿泊観光客が少ない要因は、宿泊施設が少ないことが一つの要因であると思う。そのなかでも観光客が宿泊する奈良ホテルは伝統的な建造物でもあり、無料で中に入れるが、奈良ホテルからの荒池や春日山原始林への眺望は観光戦略として非常に重要であると思う。また、日航ホテルの屋上からの眺望や保健所や教育センターからの眺望など、最近できた新しい建物の上からの眺望も取り上げていく必要があるのではないかとと思う。若草山を眺めるといふものが多く挙げられているが、春日山原始林をもっと知ってもらおう試みが重要なのではないかとと思う。

奈良公園の整備計画を県が進めており、副知事公舎や県警本部長公舎は既に空いており、転

用することが予定されている。塀は残るかもしれないが、奈良公園全体は大きく変化していくと思う。変わるという前提で計画づくりを進めなければならないのではないか。

仲谷課長：新しい視点場の話について、計画づくりの当初から視点場が大切であるという認識はあり、視点場を巡るという考え方など、観光客を呼び込む視点からは、視点場の整備は重要であると考えている。我々の知らないところを教えていただきたいというところにも市民講座の目的があるため、そのようなご意見をお願いしたい。

市民 D：No.17については、JR駅前からやすらぎの道までの間は、道路拡幅により、昔からの店はほとんどなくなってきている。奈良らしさがなくなってきている。三条通の写真を掲載するのであれば、やすらぎの道から東の写真とした方が良い。

仲谷課長：JR奈良駅を含め、三条通全体を保全し、活用していきたいという思いがある。代表的な2枚の写真を掲載させていただいている。上の写真は東側の一般的には素晴らしいと思われるような眺望景観、下の写真は直していかなければならない眺望景観といえる。上の写真では、石垣や塀を守っていかなければならないし、下の写真であれば、屋外広告物や電線類、建築物の形態意匠などは修景していかなければならないという課題がある。難しい道路ではあるが、三条通はメインストリートの一つであるため、拡幅は進んでいるが、その東側についても、眺望景観だけでなく都市計画の観点も含め、総合的な施策展開を図っていきたいと考えている。

市民 B：三条通について、下の写真の状況は現在完全になくなってしまっている。拡幅のために地区計画がかかっている。屋外広告物や建築物等の色彩の使い方などに一定の規制がかけられている。以前の店がなくなっているのは確かであるが、そのなかで新たに奈良らしい雰囲気を出していこうとしている。それを含めて三条通全体として景観を改善していくことが重要であると思う。特に大切なのは、JR奈良駅から見た時に若草山や春日山、奈良奥山が広く見えるかということである。これまでは、突き出し看板が出ており、眺望景観を妨げていたが、セットバックを進むことで改善され、良好な眺望景観が形成されることが期待できる。

仲谷課長：屋外広告物の修景や電線類の地中化などに努めていきたい。

増井教授：具体的な事例を見ていくと議論し易い。市が39件を選んだのは、将来的な課題などを検証する良い材料であるということであったと思う。白壁の保全や三条通の拡幅などの話が議論できて良かったと思う。また、第3回の講座で出てくるかと思うが、眺望景観は、近くに見る看板や建物のデザインだけでなく、その先にある春日奥山の背景まで全てを考えていかなければならない。そのようなところを全て一律に同じ規制やコントロールができないため、近いところでは行政的にどのようなメニューがあるのか、遠いところではこのようにできないかということを検証していくためには、この39件は良い事例かと思う。

境内からの眺望景観の話があったが、これは悩ましいところであり、寺が頑張れば良いというのは一理あると思う。しかし、全国的に眺望景観を見ていると、奈良の場合はかなり制度的に担保されているが、背景はかなり問題となっている。No.28とNo.29は現在、周囲が風致地区などで守られており良好に維持されているが、将来的な面も早い段階から考えておくことは重要であると思う。

秋篠寺と周囲の山並みといった里山や里の景観について意見があったが、現在都市近郊の里や里山はかなり大切にされてきている。No.34やNo.35などはまさにそのような景観であるが、都市近郊で里や里山を残していく施策は、自然環境の保全や農業の保全、都市計画的な土地利用の規制などが重要となってくるため、景観的な施策はなかなか難しい面がある。そ

のため、眺望景観を考える場合、どうしてもこのような要素があり難い面があるが、景観施策の方から里山の景観の大切さを提言していくことは重要であると思う。

その他、県の施策とのリンクということが指摘されていたが、これは市の方では宿題になってくることであると思う。奈良公園の話や近鉄奈良駅前の話などは、市の方から眺望景観の視点からの考え方を明確に打ち出していく必要がある。

(2) 重要眺望景観候補について

徳岡係長：(「重要眺望景観候補」の説明 - 略)

増井教授：なぜ12件としたのか。この12件のもつ意味を教えてください。選んだ方法は分かるが選んだ目的を説明いただきたい。

仲谷課長：奈良らしい眺望景観の候補を39件選んできたなかには、放っておいても大丈夫な眺望景観もあれば、手を加えなければならない眺望景観もある。そこで、まずは順番をつけてみたいという思いから、「奈良らしさ」と「課題の多さ」という2つの視点から点数をつけてみた。そして、奈良らしさを横軸、課題の多さを縦軸としたグラフの上にプロットしてみた。このグラフでは下の方の真中右あたりにプロットされているものが多くみられるが、これらは「奈良らしさが高く、課題も少ないもの」であるといえ、重点的な施策展開は必要ないと考えられるものである。一方、右上にプロットされているものは「奈良らしさが高いが、課題も多いもの」であり、重点的な施策展開を図っていかなければならないのはこれらの眺望景観であろうと判断したところである。つまり、問題点の多い眺望景観を重要眺望景観と位置づけており、単に素晴らしい眺望景観ではなく、素晴らしい眺望景観にしていくために、課題を解決していかなければならない眺望景観であるといえる。

市民C：眺望景観保全活用計画は市民が見る眺望景観と観光客が見る眺望景観のどちらにウェイトをおいているのか。そのウェイトの置き方によって眺望する人の見方が異なると思う。奈良市では観光の基本戦略が定まっていない。奈良らしさは歴史遺産、自然遺産、文化遺産がまちづくりに活かされていることであると思う。

仲谷課長：市民か観光客かどちらということは難しい。歴史や自然は奈良の宝であり、それをなくしてはダメだというスタンスでスタートしている。観光部局は、今ある歴史的な景観等を活用して集客しようとしている。景観部局としては、それがなくならないようにするため、現在なくなりつつあるという問題意識のもとに計画を策定して、注意喚起や提案をしていきたいと考えている。身近な景観であれば市民が主であろうし、奈良公園や鹿などは観光客向けの面が大きいのかもしれない。なかには観光客受けしないような眺望景観も含まれているが、それらは市から観光客へのPRにもなると考えている。どちらかという観光面のウェイトが少し大きいのかもしれない。しかし、先ほどの例にあがっていたような里山などは市民のためのものでもあると思うし、眺望景観をピックアップする際には市民からも募集していることを考えると市民を対象としているという面もいえる。特に心で感じる景観の特性は、市民側の意識が反映されたものが多いと考える。どちらがメインかということは難しく、半々くらいである。

市民C：市民は日常生活のなかで、自分の足で歩いたり、車から見たりするなかで日常的に感じている。奈良市の行政にとって今一番大切なのは、観光客にウェイトを置いて、観光戦略と連動した眺望景観保全活用であると思う。観光客アンケートをとっているが、どのような結果が出たのか。今後、行基広場でアンケートをとるなど、デスクワークでものを考えるのではな

く、足で歩いて感じてきた人たちの意見をもっと集める必要があるのではないかと。奈良に来る人がもう一度奈良に来てみたいと思う理由はどこにあるのか。私は、それは歴史的景観と自然景観にあるのではないかと思う。春日山原始林や東大寺などを自分の足で歩いてみたいという人が多いと思う。そのような人たちに、あの場所に行って眺望すれば奈良らしさを感じられるという導きをするのが行政の役割であると思う。

市民 B : No.18 が重要眺望景観から外れているのは残念である。難しい問題もあるのだろうが、世界遺産でいうと危機遺産並みのものである。観光客の視点からすると、ウェイトの高い場所であると思う。

住んでいる人間が心地よいと思える景観があることが大切である。そのような意味では、市民にとってどのような景観が必要で、どのような景観が大切かというもののウェイトが高くなければならないと思う。単に観光客に見せるだけの商売のための景観ではなく、住んでいて心地良いことが大切である。究極の観光は、そこに住みたいと思うことである。住みたくなるような心地の良い景観は、観光にとっても住民にとっても大切であると思う。そのあたりを含め、なぜ景観が大切かの理論立てを明確にする必要がある。景観を守るといって道徳的に守らなければならない、市民も負担しなければならないという話しになるが、そうではないということを知り易くまとめた上で計画づくりをするべきである。そうでないと行政側から押し付けられたものという印象を与えてしまう。

前回私が参加しなかったのは、タイトルが気に入らなかったからである。「市民講座」というタイトルであるが、なぜ講座なのか。上から目線で市民に教えてやるというものであれば面白くないということで、参加しなかった。もっと市民と行政が率直に意見を交換し合う場として設定した方が参加者も募れたと思う。

仲谷課長 : タイトルのつけ方はまずかったのかと思う。なぜ景観が大切かは、計画にまとめさせていたきたい。

増井教授 : なぜ景観が大切かを明確にしろということは大切である。全体の説明のなかで、117 件から 39 件を選んで、さらに 12 件に絞るということについて、市は考えをもってやっているのだと思うが、まだ分からない部分がある。第 3 回の具体的な施策を検討する際に、この 12 件が大事な点を含んでいるのだと思う。

観光が暮らしかは究極の問題かのように思うが、私自身の考え方としては、もう観光が暮らしかという議論ではなく、観光自身が変わってきていると思う。観光は、町に行くとともにある町の方々の暮らしを楽しむものになってきている。観光と暮らしの関係は、観光という外部の目によって、住んでいる人の感性や価値感が変わるものであり、眺望景観についても、外部の人が良いと気付くものもあると思う。知らない間に景観が変化し、劣化していくことに対して、神経を尖らせている人もいれば、変わっていく景観に気付かない人もいる。変なものが建てられても、それが心象風景になって、それが町を代表する景観になってしまう場合もある。例えば、私は 18 年間京都にいたが、京都タワーが心象景観になってしまっている。外部の目が常にチェック機能として働くことによって、意外とコントロールできるのではないかととも思う。挙げられている眺望景観の多くは観光客を意識したものとなっているが、外から来た人にこう思われたらいやということは、実は、市民が刻々と変化したり、少しでも変わってしまうとだめになってしまうところをチェックしてくれている面もあると思う。生活環境を良くすることと景観を良くすることはリンクしているところもある。奈良町で商業ビルが建ち並ぶよりも古い建物を残していったり、奈良らしい雰囲気

の商店になることによって、観光客が増えるという面はあるが、実は居住環境自身も良くなっている。観光は外からの刺激や再発見・再評価の手段であると考えれば、観光が暮らしかは、対立的に考えるものではないと思う。観光と暮らしの良い関係を形成していかなければならない。そのために眺望は分かり易くて良いと思う。建物のデザインの奈良らしさを考えるのは難しい。眺望から考えると皆で奈良らしさが議論し易くなる。眺望景観の議論は、小さな講座ではなく、皆で共に考えていくスタンスでやると、皆が奈良らしさや良い景観とは何かを考えていく良いきっかけになる。そのことにより施策に移していくための下地ができていく。そのような機会をもっと用意していただきたい。

重要眺望景観の12件について、その選び方に言いたいことはあると思う。12件をネタに、具体的な意見があれば出し合っていたきたい。

仲谷課長：奈良らしい眺望景観候補39件を選び12件の重要眺望景観に絞っているが、39件は39件それぞれの検討課題があり、それは整理している。そのなかで、特に課題の多い12件に関しては課題をクリアしていきたいというストーリーで計画策定を進めている。後ほど第3回の予告もあるが、まだまだ検討が進んでいない状況である。考え方も色々変わってくると思うので、多くの意見をいただいていたきたい。

市民A：A3資料「重要眺望景観候補について」の「3.重要眺望景観の選定について」では、平成24年3月に眺望景観保全活用計画を策定していくことを予定していると記載されてある。これが作業の目標であると思うが、このようなことを最初にお知らせいただくべきだったのではないかと。3回開催して、3回目の最後にならないと仕掛けやタネがわからないというのでは、この講座に申し込もうという気にならないと思う。結論を明確にして知らせ、人を集められたら良かったと思う。この3回でどのくらい奥深い議論ができたのかわからないが、行政の自己満足でしかない気もする。3月までに計画をつくっていくことは大変である。何に向かってどのような意見がどのくらい欲しいのかが分かり難い。

仲谷課長：知っていただきたいということが目的の一つである。平成24年3月という目標はあるが、計画を策定すると、それに向かって観光、都市計画、道路、農林、文化財など、各部局にも動いてもらわなければならない。平成24~25年度には、重要な地域を示していきたい。そして課題のクリアを各部局で取り組んでいただきたいと考えている。眺望景観を紹介して観光に役立てるといこともひとつである。最終的には施策がスムーズにいけば良いかと思っており、そのためにも色々な意見を収集しているところである。ホームページでのアンケートもとらせてもらっており、観光客や観光ボランティアガイドへのヒアリングなども実施してきたところである。秋篠寺のへの眺望についても、意見があげられていたので、奈良らしい眺望景観に追加するかどうかは検討したいと考えている。

市民C：重要眺望景観の選定のための総合評価にも記載してあるが、まちづくりのなかに眺望をどう入れていくのか。菖蒲池遊園地跡地では新しいまちづくりが進行中であり7~8割りできてきている。新しいまちづくりのなかで景観の保全を申し出てきて、県も市も近鉄も聞き入れていただいていた。今後の新しいまちづくりを進めていく上での行政が果たすべき役割は、景観をどう守るかであり、建物の高さをいかに調和させるか、屋外広告物をいかに規制・指導していくかであり、それらが相俟って眺望景観が守られる。そのような考え方を新しいまちづくりに積極的に取り入れて欲しい。景観法制定の背景には住民生活に景観を取り入れることがあったと思う。我々の生活空間のなかで景観が心を癒すものであること等をアピールして欲しい。

市民 B：景色を守るだけでなく復活させないといけないところもある。そのようなものもいずれピックアップして、修景していただければ良い。元明、元正両天皇の御陵があるが、あまり目立たない。そして、周辺には建築資材置場などがあり、隠れてしまっている。聖武天皇陵は最近知られるようになってきた。いずれそのようなことにも取り組んでいただきたい。

増井教授：新しいまちづくりや復活という話があったが、懇談会でも、今あるところに限らずかつてこうであったということも大切であるという意見があり、そのような視点も盛り込まれていけば良い。最近出版された入江さんの本をみるとショックを受ける。アンケートにも反映されていたかと思う。眺望景観を元に戻すことは難しいかもしれないが、できる限り修景して欲しいと思う。まちづくりに景観をしっかりと位置づけて欲しいということは良く分かる。景観だからこそ言い易いこともたくさんある。気になる看板についても、ここからの眺望が大切であるということ具体的に説明すると理解され易い面もある。古い言い方であるが、“景観からのまちづくり”という形で、眺望景観はまちづくりの良い取り掛かりになると思うので、展開を期待したい。

117 件から 39 件、12 件への絞込みが、いまひとつ分かり難いので、第 3 回ではどのような形で 12 件を具現化していくかの説明を期待したい。

(3) 第 3 回市民講座に向けて

徳岡係長：(眺望景観の保全活用方策についての概要の説明 - 略)

仲谷課長：事務局側でも現在検討中であり、分かり難いかと思う。どのような形で説明するかも検討中である。最終的には区域を設定して、それらの区域に対して一定の規制策等を入れていきたいと考えている。例えば、農地であれば農林課で景観的な農業の振興を図る区域に入れてもらうなどがある。基本的には施策を講じていく区域についての説明をしていきたいと考えている。

3 . 閉会挨拶

仲谷課長：お忙しい中ご参加いただき感謝する。元明元正陵については、本当に良いところであり、小説にも記載されていたことを思い出した。貴重なご意見に感謝する。

次回は来週土曜日の同じ時間に開催させていただく。